

途上国における教育支援ボランティアの教育的意義

—教職課程の履修学生が思考する「学校教育の意義」を手がかりに—

伊藤 嘉人 (岐阜協立大学経営学部)

キーワード：途上国，教育支援，ボランティア，学校教育，教職課程

1. 研究の背景と目的

今日の学校教育において、グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸課題への対応が求められている。このことから、学校教員はグローバル化に対応すべくグローバルなものの方や考え方などを身に付ける必要があるとされている(中央教育審議会, 2012)。しかしながら、大学における教職課程の学びは、実践的指導力の育成が重視されており、現場体験型のプログラムや実習が設定され(中央教育審議会, 2006)、教職課程の履修学生が海外へ関心を向ける物理的・精神的な余裕がないのが実態である。すなわち、各大学の教員養成課程におけるグローバル化のカリキュラムなどに関しては、各大学の裁量に任されていると言えよう(田中, 2014)。

学校教育のグローバル化に関わっては、「ローカル」という視点も持ち合わせる事が重要である。つまり「グローバル」時代における人類共通の重要な課題として、多様な「ローカル」の自立性と自律性を尊重し、その相互承認を図り、平和的な共存・共生を実現していくことが必要であると言えよう(藤田, 2013, p. 64)。本研究では、「グローバル」時代の学校教育に回答すべく、教職課程の履修学生が途上国における教育支援ボランティアを経験することで、どのような学校教育のリテラシーが形成されたのかを検証することを目的とする。

2. 途上国における教育支援ボランティアプロジェクトの概要

本研究の対象とした途上国における教育支援ボランティアは、スポーツ教育学研究者を中心に組織された SPLEA 協議会 (The Association of Sport and Physical Literacy Education for All) による国際教育協力部門を担う学生組織 (国際教育協力学生ボランティアズ ICVs : International Cooperation Volunteers) 「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」(以下、「カンボジアプロジェクト」とする) である。

このカンボジアプロジェクトは、山口大学国際協力活動推進プラットフォームにおける国際教育協力推進活動の実践研究から発足された¹⁾。2019 年度のプロジェクトには、全国 13 大学 252 名の学生が参加した。中心的な活動となる途上国における教育支援プロジェクトは、全国の学生が協力しながら自治的に活動して進められる。また、途上国への渡航に関係なく全学生に役割があり、全国の学生とソーシャルメディア等を活用して協議しながら展開される。

表1は、カンボジアプロジェクトを発足し、教員総務として中心的に実践している海野がまとめたカンボジアプロジェクトの支援方略である(海野, 2020)。カンボジアプロジェクトは、「初等・中等学校における運動会の普及による正課体育授業の定着」を上位目標に掲げ、これに向けて①クラスター内の小学校・中学校における運動会の普及と定着, ②PTTC(教員養成所)における運動会の普及と教科外体育カリキュラムの編成, ③現職教員への体育研修会(校内・クラスター)の定着の3つをプロジェクト目標として設定して教育支援活動を展開している。カンボジアプロジェクト活動に貫かれている課題意識は、効率の良い運動文化祭やパッケージ化された支援ではなく、現地の子どもたち、教員、地域に寄り添った支援のあり方を模索することであるとされる(国際教育協力学生ボランティアズ, 2020)。

このような支援方略のもと、2019年度のプロジェクトは、「貧困撲滅、すべての子どもに行き届いた教育を」をモットーに、①政府や国際機関ではなく、民間の立場から諸課題に取り組む(非政府組織), ②他者への共感・共振を基礎とした利他的あるいは互恵的活動に取り組む(国境を越えた援助・協力活動), ③あくまで、個人の自由な意思により、考え、発想し、行動(自発的な行為)する(草の根ボランティア組織), ④学ぶこと・成長すること・夢を追い求める(大学生主体の組織)として展開された。

表2は、2019年度にカンボジアプロジェクトに参加した各大学が共通して活動した記録である。これらの活動を中心とし、各大学内での定期的なミーティングやプロジェクトチームを編成し、協議しながら取り組んできた。本研究の対象としたK大学は、2018年度よりカンボジアプロジェクトに参加していることから、2019年度は2期目の活動となった。

表1 Project Design Matrix

1.事業名(事業実施期間) (Project Title / Duration)	カンボジア北西部における学校運動会の普及による正課体育授業の定着(2014~)		
2.事業実施団体名 (Name of Organization)	af SPLEAカンボジア運動会プロジェクト(現在:Quality Education for All プロジェクト)		
3.ターゲットグループ (Target Group)	チョンカル郡内の児童生徒、教職員(現在:カンボジア北西部全域に拡大)		
プロジェクト要約 (Project Summary)	指標 (Indicators)	指標データ入力手段 (Means of Verification)	外部条件 (Important Assumptions)
上位目標(Overall Goal)	初等・中等学校における運動会の普及による正課体育授業の定着		
プロジェクト目標(Project Purpose)	1) クラスター内の小学校(9校)および中学校(1校)における運動会の普及と定着 2) シェムリアップ州PTTC(教員養成所)における運動会の普及と教科外体育カリキュラムの編成 3) 現職教員への体育研修会(校内・クラスター)の定着	1) 運動会の年次行事化、体育授業の定期的実践化 2) PTTCの学生による附属小学校での運動会の開催、教科外体育の教科専門化 3) 校内およびクラスターでの教員研修会の定例化	・ 教育事務所による実態調査 ・ 学校による公務記録 ・ 日本からの派遣専門家らによる視察およびヒアリング調査
アウトプット(Output)	1) 運動会の実施形態(教師集団の指導性と児童の運営参加度合い)、手引書の利用状況 2) PTTC(教員養成所)の教科外体育カリキュラムの編成と実施 3) レッスンスタディを含む校内クラスター研修会の企画・運営の担い手養成	・ 専門家による直接参与観察 ・ 教育事務所による巡回調査 ・ 学校の公務記録 ・ 研修会参加者への質問紙調査	・ 保護者の出稼ぎ労働および児童労働 ・ 児童の栄養不良による育ちそびれ ・ 教員不足
活動(Activities)	1) クラスター内の初等・中等学校で運動会の企画・運営支援活動。「運動会の手引き」のクメール語版作成・配布、現地の教員を日本に招聘し研修を実施、運動会開催状況のモニタリング、体育施設・用具の整備 2) 教員養成カリキュラム(教科体育・教科外体育)の編成支援、授業用テキストの作成・配布、主任教員を日本に招聘し研修を実施、運動会開催状況のモニタリング、体育施設・用具の整備 3) 校・研修会の運営補助、年間研修計画の作成支援、教育事務所職員を日本に招聘し研修を実施、研修会のモニタリング	投入(Inputs) 日本側 学校行事の運営指導に関わる専門家6名及び補助員、運動会および体育授業で使用する教材・教員等の資機材、手引き及び授業用テキスト等の作成(翻訳を含む)・印刷、現地関係者への謝金、研修等参加者の日当、日本に招聘する現地の教員・教員事務所職員への旅費及び研修 カンボジア側 現地調査員(教員事務所)2名及びその手配のための人員、研修会場及び施設・設備、保健師、コミュニティ役員	学校カリキュラムの中で体育科が児童生徒の発達に果たす役割が教職員、地域住民に認知・共有されていない 前提条件(Pre-conditions) ・ プロジェクト実施期間中に深刻な政治・経済不安にないこと ・ 学校・教育行政関係者、村民との信頼関係 ・ 支援活動・計画に対する現地関係者の納得と合意

出所: 海野勇三(2020) 中・長期を見通した途上国への効果的な支援方略を描き出す試み(その2), 学校体育研究同志会愛知支部ニュース, 第533号, p.7

表2 2019年度 国際教育協力学生ボランティアズ活動の記録

活動日	主な活動内容
6月8日	第1回全体会議 (年間支援プログラムの周知、団長決め、組長決め、全体係長決め、1年間スケジュール決定)
8月15日～8月24日	カンボジア実地調査（教員総務）
9月2日～9月12日	ラオス実地調査（教員総務）
9月11・12日	プロジェクト合宿（模擬授業、交流、指導案作成）
10月12日	第2回代表者会議（13期カンボジア・プロジェクト活動の検討）
10月13日	第2回全体会議（13期カンボジア・プロジェクト活動の検討）
11月9日	第3回代表者会議（13期カンボジア・プロジェクト活動の確定）
11月10日	第3回全体会議（13期カンボジア・プロジェクト活動の確定）
11月30日～12月8日	13期カンボジア渡航
12月21日	第4回代表者会議（13期カンボジアプロジェクトの総括と14期カンボジアプロジェクトの計画）
12月22日	第4回全体会議（13期カンボジアプロジェクトの総括と14期カンボジアプロジェクトの計画）
2月8日	第5回全体会議（14期カンボジアプロジェクト活動計画の確定）
2月9日	第5回全体会議・全体総務会 (14期カンボジアプロジェクトの実施について)
2月18日～2月27日	14期カンボジアプロジェクト（シェムリアップ） 中止
2月19日～2月28日	14期カンボジアプロジェクト（北部） 中止
3月3日～3月12日	2期ラオスプロジェクト 中止

出所：国際教育協力学生ボランティアズ(2020)「貧困撲滅 全ての子どもに行き届いた教育を」2019年度活動報告書を元に伊藤が作成

3. 研究の方法

本研究では、2018年および2019年にカンボジアプロジェクトに参加した、K大学で教職課程を履修する4年次生3名、3年次生3名を対象とした。2019年度の活動については、新型コロナウイルス感染症の拡大から2020年3月に実施する予定であったカンボジア・ラオスの渡航が中止となった。そのため2019年度よりプロジェクトに加入した3年次生の3名は、カンボジアにおいてプロジェクト活動を実践することができなかった。

2019年度の活動を終えた2020年3月にカンボジアプロジェクトの活動を振り返るべく「途上国の子どもたちにとっての学校教育の意味」をテーマにレポートを作成した。この学生のレポートを、KH Coder (Mac用 3. Beta. 01e) を用いてテキストマイニングによる分析を行なった²⁾。学生が記述したレポートのテキストをKH Coderを用いて自動的に語を取り出し、頻出語を確認した上でそれらの語の共起関係を探り、プロジェクトを通した学生の思考を探った。また、前述した通り3年次生と4年次生のカンボジアプロジェクトの経験に差があるため、3年次生と4年次生を分けて分析することとした。

4. 抽出語の分析

2019年カンボジアプロジェクトの活動を振り返る学生のレポート「途上国の子どもたちにとっての学校教育の意味」のデータをKH Coderを用いて形態素解析を行った。1年間カンボジアプロジェクトに活動した3年次生3名を分析すると、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数)は2,090語、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は489語が抽出され、出現回数の平均は2.21(SD=3.47)であった。また2年間に渡ってプロジェクトで活動した4年次生3名のレポートからは、総抽出語数は2,477語、異なり語数は465語が抽出され、出現回数の平均は2.74(SD=4.89)であった。これらの頻出語のうち、出現回数が5回以上の単語を表3・4に示した。

カンボジアプロジェクトの経験に関係なく、3・4年次生に共通して出現回数の多い単語は、「教育」「学校」「子ども」「カンボジア」「考える」であった。しかしこれらの単語は、共通して多く出現しているものの、3年次生・4年次生の間で出現回数が10以上も異なり、カンボジアプロジェクトの経験によって大きな差が生じていると考えられた。

3年次生の記述の特徴的な単語としては、「歴史」「発展」「必要」「エイズ」「感染」「現在」「現地」「途上国」であった(表3)。一方、4年次生の記述において特徴的な単語としては、「必要」「日本」「貧困」「人」「活動」「学ぶ」「環境」「渡航」「授業」「体育」「抜け出す」「感じる」「見る」「地域」が挙げられた(表4)。

以上の結果から、カンボジアに渡航経験のない3年次生のレポートには、「歴史」「エイズ」など、カンボジアについての事前学習などで得た知識を中心に記述されていることに対して、渡航経験のある4年次生のレポートには、「日本」「環境」「渡航」「授業」「体育」など、現地でのプロジェクト活動を通して経験した具体的な活動や現地の環境などの実態、貧困の問題、日本との比較について思考していると読み取ることができた。

表3 3年次生における出現回数が5回以上の単語

抽出語	出現回数
子ども	20
カンボジア 学校 教育	15
考える	13
多く	11
人	10
歴史	8
国 子 発展 必要	7
エイズ 感染 現在 現地 行う 殺す 途上国	6
言う 行く 時代 状況 政権 多い 知識 背景 貧困 問題	5

表4 4年次生における出現回数が5以上の単語

抽出語	出現回数
教育	43
学校	30
子ども	29
カンボジア	26
考える	21
必要	17
日本 貧困	14
人	12
活動	11
学ぶ 環境 渡航	10
授業 体育 抜け出す	8
感じる 見る 地域	7
発展 方法	6
関わる 教員 経験 行う 受ける 整備 生きる 途上 様子	5

5. 共起ネットワークの分析

単語間の関連を検討するために、出現回数が4以上の単語を用いて共起ネットワークを検討した。分析には KH Corder を用い、共起ネットワークのサブグラフ検出（媒介）機能によって相対的に強く結びついている部分を自動的に検出し、グループ分けを行なった（描画数は 60 に設定した）。

3年次生の共起ネットワーク（図1）は、6つのグループに分けられた。第1の特徴は、出現数が最も多い「カンボジア」「教育」「子ども」を中心として6つのグループがつながっていることである。またこれらの単語は、「学校」を中心とするグループがリンクしていることから、「カンボジアの学校教育」と解釈することができる。第2の特徴としては、「現在」「時代」を媒介として、「エイズ」「感染」「亡くなる」のグループと、「政権」「殺す」「影響」「状況」のグループがリンクしている。これらは「カンボジアの歴史・環境」と解釈することができる。

一方、4年次生の共起ネットワーク（図2）は、7つのグループに分けられた。第1の特徴は、3年次生の記述と同様に出現回数の多い「教育」「学校」「子ども」「カンボジア」「考える」から「カンボジアの学校教育」を考えるグループが形成されることである。このグループには、「貧困」「抜け出す」の単語がリンクしており、カンボジアの貧困問題と学校教育について記述されている。第2の特徴は、「カンボジアの学校教育」グループが、「必要」「日本」「感じる」を含む「日本との比較」グループとリンクしていることである。ここでカンボジアの教育と日本の教育を比較していることが解釈できる。第3の特徴は、「渡航」「体育」「授業」「見る」「環境」から、「カンボジアにおける体育授業の実践」が述べられていることである。ここでは、現地の教育支援活動で実践した体育の提案授業から、カンボジア体育授業実践について考察していることが解釈できる。

以上の特徴から、カンボジアに渡航していない3年次生は、国内の活動や事前学習等で学んだ「カンボジアの歴史や環境」を中心に考察していると読み取ることができる。一方、カンボジアに渡航し、現地で

6. カンボジアプロジェクトの経験から思考される「学校教育」

ここでは、KH Corder による抽出語ならびに共起ネットワークの分析に基づき、「カンボジアにおける学校教育」について述べられた学生の記述から考察する。

2019年度のカンボジアプロジェクトは、「貧困撲滅、すべての子どもに行き届いた教育を」をテーマに活動してきた。新年度の活動を始動した2019年6月の全体会議では、各大学の代表者ならびに教員総務部員が集まり、プロジェクトの意義を再確認した。この会議では、プロジェクトを企画する教員総務より、「なぜカンボジア・ラオスの発展途上国において教育支援をするのか」、「途上国に集中的に顕現される『貧困のサイクル』において、『教育』はすべての国際協力の礎である」、「国際教育支援における教育の役割は、子どもの将来の必要に備える、子どもの現在の必要に応える」、「途上国の子どもたちに学校教育の支援を行うことは、貧困の連鎖から抜け出す確実な道である」などのプロジェクトにおける教育支援の意義について講義を受けた³⁾。K大学からは代表者1名が参加し、会議の内容は、K大学内ミーティングにて部員に伝達された。この全体会議後、全国の各部員は、プロジェクトに参加する各大学の学生達と連携し12月・3月のカンボジア・ラオスでの活動に向けてプロジェクト活動を展開した。

表5は、1年間プロジェクト活動を経験した3年次生の振り返りレポートより「カンボジアにおける学校教育」に関わるキーワードを抽出した記述である。なお3年次生は、新型コロナウイルスの拡大からカンボジアで活動することができなかった。そのため国内にて、教育支援活動の準備や、カンボジアについての学習会を行った。

3年次生の記述内容には、A：「教育の差が貧困の差を生んでいる」、C：「負の連鎖から抜け出すため」と記述されている。これらの内容は、全体会議における教員総務の講義や、K大学内におけるカンボジアの歴史・文化などの事前学習で学び得た知識をトレースされたものと考えられる。また、Bが「知識以上に必要なものが現地での経験だと考える」と述べるように、国内の活動で得た知識を現地での活動で確かめたいとの思いが綴られている。

表5 「カンボジアにおける学校教育の意義」についての3年次生の記述

Aの記述より	Bの記述より	Cの記述より
無限の可能性を持ち学びたいと願う子どもたちが学ぶ事ができない現実がある。カンボジアが今後発展していくためには、今、学びたいと願う子どもたちの力が必要である。教育の差が貧富の差を生んでしまっている。私たちは子どもたちが学ぶ事ができるように考え、行動していくことが必要だと感じた。	途上国の子どもたちにとっての学校教育の意味とは何か。これを語るにはその国の現状や歴史的背景、教育制度、経済状況、文化などこれ以上の多くの知識が必要である。また、この知識以上に必要なものが現地での経験だと考える。いくら知識があろうが、百聞は一見にしかずという言葉があるように、実際に肌で感じたことの価値は計り知れない。	負の連鎖を断ち切るために、きちんと教育を受けられるようにすることが大事だと考える。発展途上国の子どもたちにとって学校教育は必要か、私はその学校教育の意味として、負の連鎖から抜け出すことだと考える。読み書き計算等少しでも発展途上国の子どもたちが出来るようになれば自身の人生が大きく変わるのではないかと考える。

表6は、2年間プロジェクト活動を経た4年次生の振り返りレポートより、「カンボジアにおける学校教育」に関わるキーワードから抽出した記述である。レポートには、3年次生と同様にカンボジアにおける教育支援の意義について述べられているが、4年次生の記述にはさらに以下のような具体的な途上国の教育支援の方略について述べられている。D：「日本の教育のシステムをそのままカンボジアに押し付けることではなく、あくまで、カンボジアへ日本の教育のシステムを提案させてもらうことであり、最終的には、カンボジアの国と国民が自らの手で教育システムやその他の発展を構築することができるようサポートすることでもある」、E：「カンボジア全体が貧困から抜け出すためには、やはり、集団の中で人と関わり、感

性を養っていく教育現場が必要」F：「日本の教育方法が全て当てはまるのか、そもそも日本の教育方法が正しいのか。(中略)カンボジアにとっての学校教育というものがどのようにあるべきか、どのように学校教育を行なって行くのか。それは、現地の人たちにしかわからないこともある」(下線は、伊藤によるもの。以下同じ)。

以上のように述べる2年間プロジェクト活動を経験した4年次生は、カンボジア現地における教育支援の活動経験がある。現地での活動を通して、途上国の教育支援の意味や意義を自問自答してきたからこそ、具体的な方略について述べる事ができたと考えられる。これらの記述は、これまでのカンボジアプロジェクト活動に貫かれている理念である「効率の良い運動文化祭やパッケージ化された支援ではなく、現地の子どもたち、教員、地域に寄り添った支援のあり方を模索することである」に通じるものである。つまり、途上国に対して一方的な立場で支援するのではなく、カンボジアの生活に活かされる、生活の課題に根差した教育支援について考えることができた彼らの認識は、カンボジアプロジェクトの活動に貫かれている課題意識に通じる成果と言えよう。

表6 「カンボジアにおける学校教育の意義」についての4年次生の記述

Dの記述より	Eの記述より	Fの記述より
<p>私たちは、<u>学校教育を施すことこそが、貧困から抜け出すための大きな手段になること</u>と考え、現地の幼稚園や小中学校で、授業や運動会の開催、地域合同サッカー大会などの活動をしている。また、それは、<u>日本の教育のシステムをそのままカンボジアに押し付けるのではなく、あくまで、カンボジアへ日本の教育のシステムを提案させてもらうことであり、最終的には、カンボジアの国と国民が自らの手で教育システムやその他の発展を構築することができるようレポートすることである。</u>(中略)</p> <p>これらの経験ができた2度の渡航を終えた今、<u>カンボジアの子どもたちにとって学校教育は必要であると考えている</u>。理由は、2つである。1つめは、学校には子どもたちが学びを得ていること。2つめは、<u>貧困から抜け出すためである。今日を生きていくために教育は必要ないと考えていたが、教育こそが貧困から抜け出す手段であると考えたからだ。</u></p>	<p>カンボジア全体が貧困から抜け出すためには、やはり、<u>集団の中で人と関わり、感性を養っていく教育現場が必要</u>なのではないかと考える。社会は人との関わりで回っている。その<u>関係</u>を最初にもっと学ばなければならない。教育現場である。例えば学級経営や、部活動での上下関係など。様々な人との関係が社会の縮図になっている。日本の教育現場はそういった組織作りがしっかりしている。社会に出て、人と関わることに抵抗がなければ、<u>国全体ももっと盛り上がるのではないかと考える。</u></p>	<p>日本の教育方法が全て当てはまるのか、<u>そもそも日本の教育方法が正しいのか</u>。時代によって変えて行く必要はあり、日本の教育は常に変化してきている。戦争中と戦後、現在では教育方法が違う。カンボジアにとっての学校教育というものがどのようにあるべきか、どのように学校教育を行なって行くのか。それは、<u>現地の人たちにしかわからないこともある。そこに新しい考えをもたらすことが日本人として支援できることである。</u>日本の教育方法を見せることで、現地の先生たちにとって刺激になったと考えられる。これから少しでも取り入れてもらうこと、興味を持ってもらうことができれば日本人として、活動に参加させて頂いたものとして嬉しく思う。</p>

これらの4年次生のレポート中でも「今日を生きていくために教育は必要ないと考えていたが、教育こそが貧困から抜け出す手段であると考えたからだ」と記述したK大学の学生代表を務めたDのレポートに着目したい。Dは、2018年度より2年間カンボジアプロジェクトに参加した。2019年度はK大学の学生代表として、全国の加盟大学が集まる代表者会議への参加することや、代表者会議の内容をK大学のメンバーに伝達するなど、他大学と連携しながら積極的に取り組んできた。また、Dは2018年・2019年の2回カンボジアに渡航して教育支援活動に取り組んできた。2018年度は、カンボジア都市部のシェムリアップで活動し、2019年度には、シェムリアップに加え、北部の農村地域であるオドメンチェイ州にて活動した。

表7は、Dの振り返りレポートからカンボジアでの教育支援活動について抽出した記述である。表7に記されるように、Dは2018年度のシェムリアップでの活動を通してカンボジアにおける学校教育の意義を強く実感していた。しかし、2019年にカンボジア農村部のオドメンチェイ州で活動した際、住民の厳しい生活環境に直面した。「その日を生き抜くために、学校は必要ない。学校に行くことよりも、最低限の食事や水を得ることが重要である」、「こういった現実を見ると、カンボジアの子どもたちは、学校で、様々な教科を学ぶことよりも、商売の仕方や生きていく知恵を学びたいのではないかと考えた」と述べるように、貧困の現実と学校教育の意義について思考を巡らせている。さらにDは、「現在の私には、カンボジアの子

どもたちに対し、学校教育で何を教え、何をできるようにしたらいいのかは、まだわからない。しかし、学校で教育を受けることこそが、人を育て、貧困を抜け出す力をつける手段になることは、理解できている。」と述べる。

このように述べる D は、カンボジアプロジェクトのテーマである「貧困撲滅」の教育支援活動を理念として理解しているものの、「現在の私には、カンボジアの子どもたちに対し、学校教育で何を教え、何をできるようにしたらいいのかは、まだわからない」と吐露している。この D の記述から、カンボジアの生活課題を直視し現地に根差した教育支援を真摯に考え、自問自答する D の思考を読み取ることができよう。

表7 カンボジアにおける教育支援活動に関わる D の記述

2018年の渡航経験について	2019年度の渡航経験について	2018・2019年度の渡航経験からの考察 「途上国の子どもたちにとっての学校教育の意義」
<p>昨年度の渡航後は、カンボジアの子どもたちにとって学校教育は必要であると強く感じることができていた。中学生に授業を聞けば、子どもたちは興味や関心を持ち、休み時間でも、自ら学び続ける様子が見られるなど、子どもたちが授業に熱中する姿が見られた。この経験から、カンボジアの子どもたちは、学ぶ意欲がとても高いと感じていた。しかし、その一方で、体育の授業に、体育の先生が不在であるという現実もあった。子どもたちに意欲がありながら、学校で、先生がその機会をなくしてしまっていたのである。こういった環境を目の当たりにし、学校教育の環境を良くしていければ、子どもたちが、より成長していけると確信していた。以上の経験から、子どもたちが学校で学ぶことや、仲間と授業を受けることを楽しんでいる様子や、実際に授業を行うことから感じる事ができ、学校教育は必要であると考えていた。また、課題が見えたことで、継続的な支援の必要性も感じていた。</p>	<p>今年度の渡航では、カンボジアの子どもにとって、学校教育は必要ないと考えた場面もあった。そう考えたのは、サムロンという田舎町での活動からである。サムロンの人々は、今日その日を生きているように見えた。例えば、衣服・食事・住居において、カンボジア中心部と比べれば数段レベルが下がった印象であった。その日を生き抜くために、学校は必要ない。学校に行くことよりも、最低限の食事や水を得ることが重要である。また、そのためには、お金が必要である。学校に行く時間があるならば、働いた方がいいということだ。生きていくためには、読み・書き・計算よりも、仕事の方法を覚えることが必要だ。こういった現実を見ると、カンボジアの子どもたちは、学校で、様々な教科を学ぶことよりも、商売の仕方や生きていく知恵を学びたいのではないかと考えた。</p>	<p>これらの経験ができた2度の渡航を終えた今、カンボジアの子どもたちにとって学校教育は必要であると考えている。理由は、2つである。1つめは、学校には子どもたちが学びを待っていること。2つめは、貧困から抜け出すためである。今日を生きていくために教育は必要ないと考えていたが、教育こそが貧困から抜け出す手段であると考えたからだ。（中略）貧困は、収入が得られないことから発生し、安定した収入を得ていくためには、読み・書き・計算が最低限でなければならぬ。教育を受けることこそが貧困から抜け出す唯一の方法ともいえるのではないだろうか。現在の私には、カンボジアの子どもたちに対し、学校教育で何を教え、何をできるようにしたらいいのかは、まだわからない。しかし、学校で教育を受けることこそが、人を育て、貧困を抜け出す力をつける手段になることは、理解できている。以上から、発展途上国の子どもたちにとって学校教育の意義は、貧困（貧困のスパイラル）から抜け出すためであると考えた。学校教育を受けた子どもたちが貧困から抜け出したかどうかはわからない。しかし、学校教育に意味があるならば、子どもたちのために信じて続けていくしかない。</p>

7. 結語：途上国における教育支援ボランティアの経験から思考される「学校教育の意義」

本研究では、「グローバル」時代の学校教育に応答すべく、教職課程の履修学生が途上国における教育支援ボランティアを経験することで、どのような学校教育のリテラシーが形成されたのかを検証することを目的とした。カンボジアにおける教育支援ボランティアの活動を通して K 大学教職課程履修学生が思考した「学校教育の意義」について次の3点にまとめて指摘したい。

第1は、「貧困・生活課題と学校教育の意義」である。学校教育における貧困問題については、途上国のカンボジアに限ったことではない。日本においても、子どもの貧困率を示す「相対的貧困率」は、13.5%であり、子どもの7人に1人が貧困世帯で暮らしている（厚生労働省, 2019）。学校教育における脱貧困のための学びとして、「貧困を学ぶことで、貧困を生み出さない仕組みを考え、それを実現していくための知恵と力を形成していくことが求められている」と指摘されている（藤井, 2012, p. 163）。正にカンボジアプロジェクトの参加学生たちは、活動を通してカンボジアの貧困問題を学び、また現地の教育支援をすることで、「貧困のスパイラル」から抜け出す、脱貧困の「学校教育の意義」について思考したと言えよう。

第2は、「途上国の教育支援と学校教育の意義」である。カンボジアの体育開発に関わってきた山口は、カンボジアの日本型支援について「カンボジアの体育・スポーツ史及び現況を見つめ、ステークホルダーが体育に関する基本情報を共有し、その中で対話を通じて方向性を探る以外手がない（山口, 2014, p. 7）」

と指摘する。カンボジアプロジェクトのプログラムを発足させ、企画してきた海野は、カンボジアにおける教育支援のあり方を次のように言及する。①現地の必要と要求に適した支援であること、②現地の人々による自立的・自主的な取り組みを励ます支援である、③現地の子ども-教師-学校、そして地方教育事務所の各当事者との間で辛抱強く対話を重ねながら合意形成を図ることが決定的に重要である（海野, 2015, p. 56）。

このようなカンボジアプロジェクトの理念は、プロジェクトの参加を通して形成された学生の認識にも投影された。プロジェクトを経験した学生は、現地の子どもたちとの関わりや生活課題を目の当たりにし、「何のための教育支援なのか」、「現地にとって本当に必要な支援なのか」と自問自答していた。これらの学生の問いは、「何のための教育なのか」、「学校は何のためにあるのか」と途上国の教育支援から「学校教育の意義」を思考しながら活動することができたと言えよう。

第3は、「理論と実践を統合する教育実践の中で学校教育の意義を思考する」ことである。今日、旅行代理店などによる、東南アジアの教育支援をプログラムとする様々な「スタディーツアー」が散見される。本研究の対象としたカンボジアにおける教育支援ボランティアのプログラムは、企画段階から学生が自治的に参画し、教育支援の内容や方法も学生が企画することから、活動の主体は学生であり「ツアー」ではない。教育環境だけでなく、生活や文化が日本と全く異なる地域で展開される途上国での教育支援活動は、現地の問題や課題と向き合い、学校教育に関する様々な価値観が揺さぶられ、思考錯誤しながら実践せざるを得ない。

佐藤によれば教師の専門職性は、「専門的な知識と理論を基盤とする『省察 (reflection)』と『判断 (judgment)』の能力として成立し、専門家教育 (学び) の本質は、「理論と実践の統合」にあると指摘する (佐藤, 2015, p. 61)。カンボジアプロジェクトは、「貧困撲滅、すべての子どもに行き届いた教育を」をテーマに現地に寄り添った教育支援を展開することを理念とし、実践はカンボジアの子どもたちや学校教育にとってどのような意味があるのか、「省察」と「判断」繰り返しながら進められる。それは、佐藤が指摘する「理論と実践の統合」する「学校教育の意義」を問い直す教育実践であるといえ、教職課程を履修する学生にとって「学び続ける教師」として貴重な経験となったと言えよう。

最後に本研究の課題について述べる。2019年度よりプロジェクトに参加した3年次生は、新型コロナウイルス感染症の影響からカンボジアに渡航することができなかった。一方、現地での教育支援活動を経験した4年次生は、子どもたちとの交流や実践を通して、現地の実態を肌で感じることで、途上国に必要な学校教育を自問自答することができた。コロナ禍において容易に渡航することができない現在、途上国における教育支援活動に取り組む参加学生たちが、途上国の実態をリアルに感じ活動ができるかが問われている。「グローバル」な視点を持ち合わせた途上国における学校教育の意義を問う、国内活動プログラムを検討する必要がある。

注

- 1) 「カンボジアの子どもたちに学校教育の素晴らしさを届けるプロジェクト」についての発足経緯、課題意識と組織体制については、海野勇三、入江航生 (2012) を参照
- 2) KH Coder は、従来の Correlational アプローチと比較して、データを要約・提示する際に「手作業」を省くことで、分析者の持つ理論や問題意識によるバイアスをより明確に排除することができる。また、従来の Dictionary-based アプローチと比較しても、多変量解析によってデータを要約・提示するという手順を加えられていることから客観的に

分析される。さらに、テキスト型データに含まれる様々な側面に自由に焦点を絞ることができる（樋口, 2004, 2020）。

以上のことから、本研究では学生の記述内容を分析するソフトとしてKH Coderを用いた。

3) 2019年6月8日第1回全体会議 SPLEA(ICVs)全体総務会資料「2019年度 SPLEA 国際教育協力プロジェクト構想」

文献

- 厚生労働省（2019）2019年国民生活基礎調査 (<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/03.pdf>), 2020年9月11日アクセス
- 樋口耕一（2004）テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合，理論と方法，第19巻 第1号，pp. 101-115
- 樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して（第2版），ナカニシヤ出版
- 藤井啓之（2012）現代の貧困と教師・学校，シリーズ現代の教職4 新しい時代の教育方法，ミネルヴァ書房，pp. 156-168
- 藤岡恭子，伊藤嘉人（2019）カンボジアにおける参加型実践の教育的意義：参加学生にとっての「経験の意味」を手がかりに，岐阜協立大学論集，第53巻第1号，pp. 87-103
- 藤田英典（2013）グローバル時代における学校教育の課題，日本学校教育学会，グローバル時代の学校教育，三恵社，pp. 23-71
- 奥山和子（2020）教員養成系における短期海外研修プログラムの学びの可視と多角的分析：グローバル・コンピテンシーをもつ教員の育成を目指して，教育科学論集，第23巻，pp. 11-19
- 海野勇三，入江航生（2012）カンボジアの子どもたちに学校体育を：北部チョンカル村での運動会開催の試み，山口大学国際協力活動推進プラットフォーム 2012年度活動報告，（http://www.iassc.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/kokusai/platform/pdf_20131419/20130419_2.pdf），2020年9月1日アクセス
- 海野勇三（2015）カンボジアにおける国際教育協力の試み：チョンカル村に根差す生活体育の展開，たのしい体育・スポーツ，第288号，学校体育研究同志会，pp. 54-59
- 海野勇三（2020）中・長期を見通した途上国への効果的な支援方略を描き出す試み（その2），学校体育研究同志会愛知支部ニュース，第533号，p. 7
- 国際教育協力学生ボランティアズ(2020)「貧困撲滅 全ての子どもに行き届いた教育を」2019年度活動報告書
- 佐藤学（2015）専門家としての教師を育てる：教師教育改革のグランドデザイン，岩波書店
- 田中光晴（2014）教員養成課程のグローバル化に関する動向，東北大学大学院教育学研究科研究年報，第63集・第1号，pp. 245-261
- 中央教育審議会（2005）初等中等教育における国際教育推進検討会報告：国際社会を生きる人材を育成するために，（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/_icsFiles/afiefieldfile/2018/01/19/1400589_001.pdf）2020年9月11日アクセス
- 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について，（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/058/shiryo/attach/1366868.htm）2020年9月11日アクセス
- 中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた 教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf），2020年9月11日アクセス
- 山口拓（2014）カンボジアの事例からみる日本型支援の方向性，現代スポーツ評論，第31号，創文企画，pp. 102-109